

シルクロードの国際交易都市スイヤブの成立と変遷 —キルギス共和国アク・ベシム遺跡の調査(2025)—

櫛原 功一 帝京大学文化財研究所 准教授
山内 和也 帝京大学文化財研究所 教授・所長
平野 修 帝京大学文化財研究所 研究員
望月 秀和 帝京大学文化財研究所 研究員

The Foundation and Development of Suyab, an Ancient Multicultural Trading City of the Silk Road: Excavation of Ak-Besim, Kyrgyz Republic (2025)

KUSHIHARA Koichi Associate Professor, Research Institute of Cultural Properties, Teikyo University
YAMAUCHI Kazuya Professor, Director, Research Institute of Cultural Properties, Teikyo University
HIRANO Osamu Researcher, Research Institute of Cultural Properties, Teikyo University
MOCHIZUKI Hidekazu Researcher, Research Institute of Cultural Properties, Teikyo University

1. はじめに

中央アジア、キルギス共和国に所在するアク・ベシム遺跡は、5~6世紀にソグド人が建設し、12世紀まで存続したシャフリスタン1、および7世紀代に唐が建設したシャフリスタン2が隣接した複合都市遺跡である(図1)。帝京大学文化財研究所では、キルギス共和国国立科学アカデミーとの合意書、了解覚書にもとづき、2016年より継続的にアク・ベシム遺跡の共同調査を実施している。2025年4~5月には前年に引き続き、シャフリスタン1の東方キリスト教会跡(AKB-8区)、シャフリスタン2の中核部(AKB-15区)、推定大雲寺跡(AKB-21区)の3地点で調査を実施し、8月には出土遺物の調査、動植物遺体の分析、保存修復作業を行った。

なお本調査は基盤研究(S)「シルクロードの国際交易都市スイヤブの成立と展開—農耕都市空間と遊牧民世界の共存—」(代表：山内和也)による研究成果の一部である。

2. 東方キリスト教会跡(AKB-8区)の調査

この遺構はシャフリスタン1の南東コーナーに位置する建物群で、1996~1998年にセミョーノフが調査し、日干しレンガやパフサ・ブロックを積み重ねて構築された56×42mの大規模な建物群が明らかになった。それらは礼拝室の東端に聖室をもつ東西に長い構造を基本形とする複合体A~Cが3つ連結し、その北

側に庭に面して小部屋構造が連なるもので、出土遺物から10世紀代創建と推定されている。

2021年、教会南側の調査を開始し、22年には教会東壁の外周、23年には教会外周での周壕状遺構および複合体Bの中庭、複合体Cの北側での井戸状遺構の調査、24年には教会東壁の外周および複合体Bの中庭での調査を行った。2025年の調査では、東側外周の調査を複合体Cの北端まで拡張し、壁の外周および下部構造を確認するとともに、複合体B内部の中庭地点の調査区を拡張し、掘り下げを進めた。

これまでの調査成果としては、複合体Aの東側に深さ3m程度の周壕状遺構が確認されている。これは建物群に平行する大きな溝であるが、シャフリスタン1の東壁構築の際の盛土確保のため、周壕状に掘り込まれたことが考えられる。11世紀代には教会東壁に沿って回廊状遺構が追加整備され、その裾に直線的な溝が設置された。2025年の調査では、教会東壁の外周構造を明らかにすること、建物群がどのような順で建設されたのか、その建設年代はいつか、などの解明を目的とし、教会東壁から外周に向けてトレンチを設定した。その結果、教会東壁は全体として直線的に整備されていること、複合体BとCでは下部構造に違いがあり、複合体Cの下層には間層をはさんでさらに続く硬化面が存在することから、少なくともBとCには構築年代差があり、Cは最も新しい段階での建設と推測された。なお、その後の年代測定で、複合体C下層の間層出土の遺物が9世紀代と判明している。



図1 アク・ベシム遺跡調査区の位置

複合体Bの中庭地点では、礼拝室に相当する東側半分を調査区として設定し、全面的に掘り下げているが、まだ最下層にまで到達していない(図2)。平面図によれば、複合体B・Cは壁を共有し同規模で構造が類似するが、複合体Bでは、礼拝室に相当する部分が建物ではなく、中庭として認識されている。また複合体Aは8世紀代の建設とされる第1キリスト教会跡に規模、構造が類似することが既に指摘されており、第1キリスト教会跡と複合体Aは建設年代も近いと推測することができる。これらの3つの建物は壁を共有する平行した配置だが、AとBは壁の向きがわずかに異なることから(図3)、A→B→Cの順で構築された建物群で、Aの創建時期は9世紀代に遡るものではないかと推測している。

3. 中枢部(AKB-15区)の調査

シャフリスタン2は不整五角形の城壁をもち、中央に方形の中枢部がかつて存在した。その中枢部の調査区がAKB-15区である。中枢部内には複数の基壇遺構が南北に配置し、なかでも1号基壇は東西33m、南北



図2 複合体Bの中庭地点

21mの規模をもつ。また周囲に回廊状遺構が取り囲み、南面には石碑や庭石が立てられていたことがこれまでの調査で判明した(図4)。また基壇西側には2017年に発見された瓦帯が検出され、1号基壇の建物の屋根瓦などが2次的に片付けられたように見つかっている。2018年には、その瓦帯の北端で赤、緑、白などの円礫を花柄にデザインした卵石散水を伴う雨落ち溝が発見された。

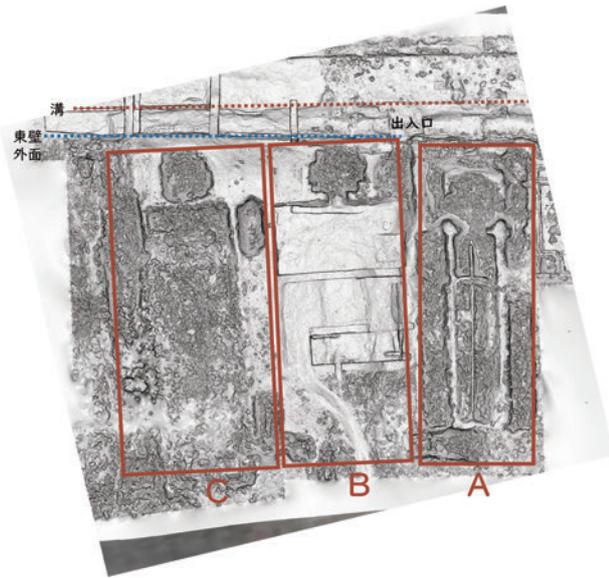


図3 東方キリスト教会跡の複合体A~C

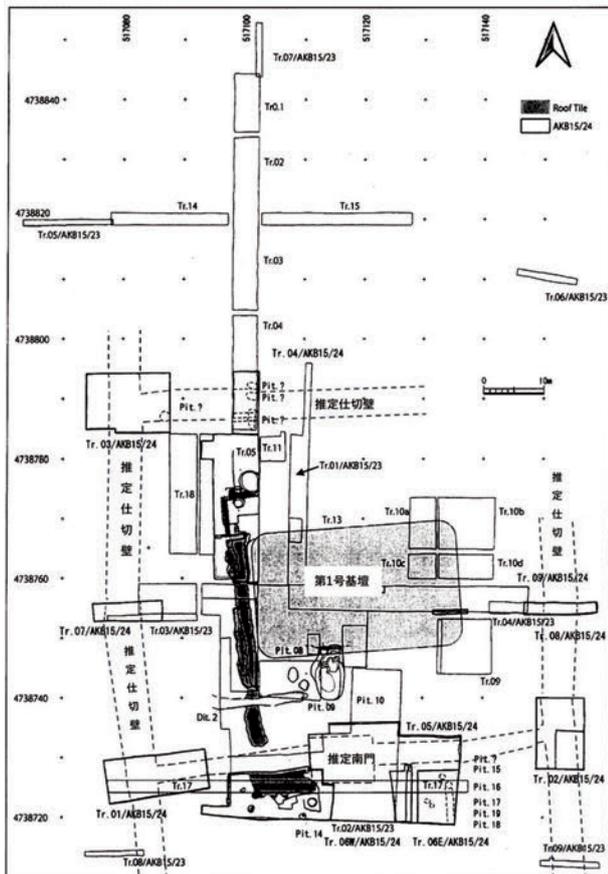


図4 AKB-15区の基壇・回廊遺構等の配置図

昨年の調査では、1号基壇の南面、西寄りの位置で基壇に切り込むようにして確認されたPit10を掘削し、東西5.5m、南北9.1m、深さ約3mの楕円形を呈したきわめて大型の穴であることが判明した。穴の覆土中層には瓦や土器、獣骨を多量に含んだ層が堆積し、

年代測定では7世紀後半から8世紀中ごろの年代であることから、1号基壇の建物が焼失したのち、火災ごみが廃棄されたごみ穴(廃棄坑)ではないかと考えられている。しかし基壇前に大きな穴を掘削した理由が定かではないことから、本年度、遺構と基壇との関係、遺構の性格を明らかにするため、穴の壁の立ち上がり部分や底面を再度精査した。その結果、ピット北側の基壇寄りに大型甕を正位に埋設した重複ピットが新たに検出されたほか、基壇北側でも埋設された甕が確認され、基壇をはさんで南北に土器埋設遺構が存在することがわかった。ただし土器の埋設時期は唐支配のうちに基壇周辺が居住地として再利用されたさいに設置されたものとみられる。

また1号基壇周辺の規模や構造を明らかにするため、基壇周辺で遺構確認を実施したほか、花柄石敷きの続きを拡張し、卵石散水の南側がL字状に折れて西側に伸びていることがわかった。なお花柄石敷きに伴う瓦には複弁蓮華文軒丸瓦が多い一方、1号基壇、瓦帯には単弁蓮華文が多く、AKB-21区(推定大雲寺)出土瓦の様相と共通する。したがって前者が碎葉鎮築城期(679年頃)、後者が大雲寺創建期(692年頃)と推定され、中枢部内の整備過程を推定できる。

4. 推定大雲寺跡(AKB-21区)の調査

AKB-21区は、シャフリスタン2の中枢部南西に位置する仏教寺院跡である。1939年、バルンシュタムが当時残存していた基壇状遺構においてI・II区を調査し(AKB-0区)、瓦が厚く堆積したI区を仏教小礼拝堂、II区を僧院と推定した。この地点では、2024年より龍谷大学との共同調査を開始し、バルンシュタムの調査区付近を中心に龍谷大チームが調査を行い、その南側の基壇建物を中心に帝京大が調査を実施している。

この地点を大雲寺と推定するのは、杜環『経行記』にみる大雲寺存続の記録、および中国式瓦が出土することからで、記録には以下のように記述されている。

「又有碎葉城、天寶七年〔748〕、北庭節度使王正見薄伐、城壁摧毀、邑居零落。昔、交河公主所居止之處。建大雲寺、猶存。」

杜環がタラス河の戦いの折、碎葉城に立ち寄ったのは751年のことで、交河公主が蘇祿に嫁したのは723年のこととされる。現在、推定大雲寺跡の地点はほぼ平坦な畑地であるが、1967年撮影の空中写真によれば、長方形の伽藍区画内の南側に2つの方形区画、そ



図5 推定大雲寺跡の航空写真(1967)

の北側に基壇遺構、さらにベルンシュタムの調査区が位置するのがわかる(図5)。それらのうち、手前2つの区画を双塔、基壇遺構を金堂と推測し、基壇遺構にかかるように長いトレンチを設定して調査を開始した。

大雲寺は、690年に武則天が命じて両都各州に設置された寺院である。多くは既存の前身寺院を転用したようであるが、中国国内での調査事例は少なく、伽藍配置の特徴など明らかではない。アク・ベシム遺跡では文献上、大雲寺が存在したことが明らかではあるが、AKB-21区の仏教寺院跡が確実に大雲寺跡であったとする調査データは得られていない。また690年段階に、碎葉鎮は唐の支配下になかったことから、大雲寺が建立されたのは唐がこの地を奪還した692年以降と考えられる。その一方で、アク・ベシム遺跡では、安西副都護の杜懷宝が母の冥福を祈って建てた「杜懷宝碑」がかつて発見されていることから、大雲寺以前にそれを納めた前身寺院が存在した可能性が指摘されている。

2025年には基壇北側に焼成レンガと礫を積み重ねた基壇の一边が検出された(図6)。これは修築段階の基壇外装ではあるが、基壇規模は東西33m、南北20mと推定され、AKB-15区の1号基壇とほぼ同規模である点が確認された。また北辺中央には方形花崗岩を並べた階段遺構の1段目とみられる構造が検出されたほ



図6 基壇北側で検出された焼成レンガ列



図7 基壇北側中央の階段石



図8 赤色砂岩で製作された石造仏

か(図7)、基壇北側には多量の中国式布目瓦と模倣形態の赤瓦が混在するようにして出土した。さらに瓦とともに赤色砂岩を用いて製作された石仏の破片(図8)、獣面文瓦(図9)、塑像仏の破片、壁面装飾とみられる金箔などが出土するなど、仏教色の強い遺物が多い。

出土した軒丸瓦は単弁蓮華文を主とし、それに先行するとみられる複弁蓮華文軒丸瓦はまったく存在しない。城倉正祥氏が武則天段階では複弁蓮華文が少ない



図9 獸面文瓦



図10 赤瓦に描かれた女性顔面図



図11 赤平瓦に描かれた線刻人物画

ことを指摘しているが(城倉 2021)、それに合致する。また軒平瓦としてごく少量の連続押圧重弧文が出土している。赤瓦は、基本的に内面に布目痕がなく、平瓦であれば桶巻作りから1枚作りへ、丸瓦であれば円筒2本作りから1枚作りへと変遷をたどっている。平瓦1枚作りに例外的に布目痕を持つものがあるほか、円筒2本作りの丸瓦には玉縁をもつもの、もたないものがあるなど、瓦の変遷過程を示している。また赤瓦の

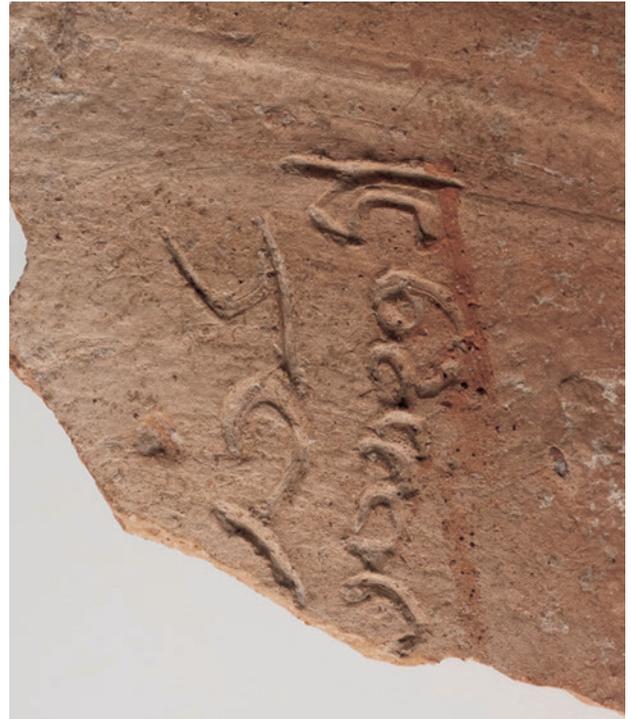


図12 赤丸瓦に描かれたソグド文字

中にはヘラ描き、指などによる人物画を描いた平瓦(図10・11)、ソグド文字の刻書文字をもつ丸瓦があり(図12)、ソグド文字の一例は吉田豊氏によれば「この(建物)は、経典(用の蔵である)」と判読されている。

5. まとめ

シャフリスタン1では東方キリスト教会跡の外周の調査をほぼ終え、複合体B内部の本格的な調査に移行しつつある。教会建物群は複合体AからCへ、南側から北側に向かって順次増築されたと考えられ、建設時期は9世紀から11世紀ではなかったかと推測されるが、創建年代を示す手がかりや埋葬人骨の検出が期待される。

またシャフリスタン2ではPit10周辺の調査がほぼ終息したことから、今後は回廊状遺構や基壇上面の調査を行うこととなる。また推定大雲寺跡では基壇各辺の確認を行うとともに、基壇上面の礎石痕などの調査を進め、中国経由の仏教寺院が中央アジアで定着化する過程、瓦の製作技術の変遷について明らかにしていきたい。

■参考文献

- ・山内和也・榑原功一・平野修・望月秀和ほか 2024『アク・ベシム(スイヤブ)2022・2023』帝京大学文化財研究所・キルギス共和国科学アカデミー。
- ・城倉正祥 2021『唐代都城の空間構造とその展開』早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所。